

撰 眞 傳 教 大 師 法 華 研 鑽 年 表

は じ め に

戦後歴史ブームによって、いたづらに歴史ものと言われる出版が増大して、いわゆる歴史家が輩出した。それに加えて近ごろは、仏教ブームで数多の刊行物を見ることは、ご同慶の至りであります。然し少くとも史料を扱うものは、常にその史料の信憑性について慎重でなければならぬ。このことについて江戸時代に伴信友先生は史籍年表を小泉安次郎先生も明治年間に日本史籍年表を労作している。今それ等の年表を論ずる余白がないので又の機会にゆずるが、仏教の歴史を語るものは、その取扱う史料について十分な配慮をせなければならぬ。そこに仏書の真偽問題がある。東京大学史料編纂所は一般史料と共に仏教史料についても、その取扱に万全の態度をもって、大日本古文書を編纂しつつあるのである。頃来仏教史家の中には、時に逸脱的な史料の扱をするものを散見するのである。そこでは、いやしくも法華研鑽史を説くものは、その史料の真偽について特別の研究を要すると思うのである。「眞撰伝教大師法華研鑽年表」を編した所にもまたここにある。

なお伝教大師「将来経疏目錄」小編は昭和三十九年三月の「立正史学」第二八号二頁〜三六頁にあり、重伝の部・初伝の部に分つて大日本古文書・伝教大師全集・縮刷大蔵経と照合してあるから同学の士は参照されたい。

今ついでに、平安時代伝来の法華経論疏中最澄の将来を列記すると、彼の将来経論疏の総数は二三〇部であるが、

伝教大師法華研鑽年表

今我々の課題に関係あるものは次の三三部である。

1 重伝 (奈良朝所伝を最澄が重伝したもの)

妙法蓮華經 7 卷 (伝全 4—114)・同玄義 智者 10 卷 (同 351)・同文句疏 智者 10 卷 (同)・摩訶止観 智者 10 卷 (同 352)・小止観 智者 10 卷 (同 354・362)・四教儀 智者 12 卷 (同 355) 以上一〇部

2 初伝 (最澄が本邦に初めて伝来したもの)

妙法蓮華經玄義 荆溪 10 卷 (伝全 4—351)・同文句疏記 荆溪 10 卷 (同)・同観音品義 智者 10 卷 (同)・同観音品義疏 智者 2 卷 (同)・同科文 左溪 2 卷 (同)・同観音偈科文 1 卷 (同 352)・同大意 荆溪 1 卷 (同)・同文句序 神廻 1 卷 (同)・同懺法 智者 1 卷 (同)・同三昧補助儀 荆溪 1 卷 (同)・同大意 1 卷 (同)・同玄義疏科文 1 卷 (同)・同文句疏科文 1 卷 (同)・摩訶止観補行伝弘決 荆溪 10 卷 (同)・同文句 荆溪 2 卷 (同 353)・同義例 荆溪 2 卷 (同)・同心要 1 卷 (同)・同音 1 卷 (同)・同略音 1 卷 (同)・同大意 荆溪 1 卷 (同)・同八教大意 明曠 1 卷 (同)・同科文 1 卷 (同)・同三徳図 一張 (同) 以上三三部

凡 例

この年表の記載事項は西暦・年代・書名・巻数・著作者・類別・所在刊本・別称・成立年・解題等である。書目の配列は年代順とした。

- 。別——書目の別称 (通名を含む)
- 。類——類別 (天台)
- 。活——刊本
- 。解——解題で末尾の書名は解題の参考資料
- 。仏全——大日本仏教全書 (巻二頁)
- 。日藏——日本大蔵經 (巻二頁)
- 。著——著作者名
- 。在——該書の所在
- 。成——該書の成立年代又はそれに関する記録
- 。伝全——伝教大師全集 (大正元年天台宗刊行会) (巻二頁)
- 。仏解——仏書解説大辞典 (巻三頁)
- 。国目——国書総目録 岩波書店版 (巻二頁)

805	804	802	801	797	787
延暦 24・(唐)貞元 21	(唐)貞元 20	延暦 21	延暦 20	延暦 16	延暦 6
<p>天台宗末決 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2-609 別―唐決・在唐一〇問</p> <p>成―貞元二年二月二十九日奥書 解―在唐の最澄が宗義一〇条の質疑に対し道遠が答決したもの。 日藏 51-558 仏解 8-130 国目 6-30</p> <p>伝教大師将来目錄 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4-683 別―台州録・越州録</p> <p>成―延暦二四年七月一五日上表 解―在唐中台州にて天台関係一二八部三四五巻と法具を得、越州にて密教、天台、雑部等一〇二部一一五巻を得た目錄を上表文と共に奉った文献である。 日藏 61-611 仏解 8-162 国目 5-314</p>	<p>天台靈応図本伝集 10巻(2巻現存) 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 3-343</p> <p>成―貞元二〇年仲冬 解―在唐貞元仲冬靈応本伝一〇巻に国清寺藏本を模し大師靈応図を添う。 日藏 61-610 仏解 8-146 国目 5-848</p>	<p>請入唐請益表 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4-719</p> <p>成―延暦二一年九月 解―同年八月高雄で法華を講じ九月上表入唐求法を請うた表文。三論法相の論に対し天台は経を所依とする経宗を伝え法華の深旨を悉知せんことを願った。 仏解 5-398 国目 4-478</p>	<p>請十大徳書 1通 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 5-437</p> <p>成―延暦二〇年一月奥書 解―天台の祥月忌に南都の十大徳を請じ法華一〇講法会を催した書翰、一〇講会は延暦一七年に初め年々無闕妙法普及の第一歩である。 仏解 5-398 国目 4-416</p>	<p>經師観行 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2-281</p> <p>成―延暦一五年六月奥書あるも成立年に延暦二五・二六年説あるも今暫く一五・六年とする 解―書写法師が止観修行の要法、一心戒定慧の観を説く。 日藏 51-598 仏解 2-288 国目 3-517</p>	<p>発願文 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 1-1</p> <p>成―延暦五・六年頃 解―大師の無常観と自己反省に依り五誓願を立てこの願力により五神通を得衆生救済に菩薩行を勵み未來際を尽すまで休止せずと誓った願文、読者の肺腑を刺す学徒立志の文辞である。 仏解 2-211 国目 2-372</p>

伝教大師法華研鑽年表

伝教大師法華研鑽年表

812	811	810	809	806
<p>弘仁 3</p> <p>長講法華經先分發願文 同後分略發願文 2卷 著—最澄 類—天台 在—伝全 2-285 別—長講法華經會式 成—弘仁三年四月五日奥書 解—法華經長講により、一切衆生大小神祇登霞尊靈万民の得脱と、日本国正法叡山の擁護を祈願した願文下巻に後人の加筆あるも全文偽作に非ず 日藏 51-603 仏解 8-56 国目 7-350</p> <p>弘仁三年遺書 1巻 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4-735</p> <p>成—弘仁三年五月八日 解—泰範を総別当、円澄を伝法座主、外諸別当を定め、私に是非することを誠め、経蔵出入を禁ずる等の規定を遺言したものである。 仏解 3-324 国目 3-282</p>	<p>弘仁 2</p> <p>御経蔵宝物聖教等目錄 1巻 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4-677 別—経蔵目錄 成—弘仁二年七月一七日奥書 解—真言道具、大唐将来書、書法目錄外法具等を止観院、比叡鎮国道場に永納した目錄である。 仏解 2-288 日藏 61-612 国目 3-354</p>	<p>弘仁 1</p> <p>三種悉地印信(付法) 1巻 著—最澄 類—天台 在—活 仏全 2-196 伝全 2-619 成—弘仁元年五月一四日 解—本朝台祖撰述密部書目に、便に依て標出す、是れ順眺和尚が開山に授ける付法の書なり。秘録に云く、澄和上顕戒論縁起中に出すと序に「若鑿此文恐偏執者將断聖化」とあり。 仏解 4-80 国目 3-797</p>	<p>大同 4</p> <p>伝教大師大同四年四月二十五日於一乘院止観院始被修法華長講願文 2巻 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4-719 別—長講法華經會式 成—大同四年二月一五日首書 解—法華宗を建立し法華經玄疏止観等數百巻を書写して七大寺に永納、妙法蓮華經を長講して恒に一乘法を護つて日本国十方世界にその功德は遍く五姓皆成仏せんことを期した願文。 仏解 8-56 国目 7-350</p>	<p>延暦 25</p> <p>天台法華宗年分縁起 1巻 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 3-269 成—延暦二五年一月二六日奥書 解—三首より成る同月三日年分度者二人新加の請願と上奏文に対する内裏僧綱の意見、更にと同二六日年分度者二人を新に追加し諸宗度者の数を定めた官符。これ日本天台宗開宗の勅許と見るべきか。 自筆殘本国宝延暦寺蔵 仏解 8-143 国目 5-847</p>

817	816	814	813	812
<p>弘仁 8</p> <p>照権実鏡 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2―571</p> <p>成―弘仁八年二月奥書 解―徳一の仏性抄を破し十門を立て三乗別教は、三権一乗、円教は一実で法華一乗は真実教であることを論ず。 日蔵 51―582 仏解 5―392 国目 4―404</p>	<p>弘仁 7</p> <p>大唐新羅諸宗義匠依憑天台集 1巻 著―修禪和尚撰最澄述 類―天台 在―活 伝全 2―583 別―依憑天台集</p> <p>成―弘仁七年序文 解―弘仁四年九月一日の本文あるは最澄四七才の撰述に五〇才附加したものである。天台の伝法は諸宗の明鏡、印度支那朝鮮に亘る天台依憑の五宗十三師をあげ、歴代称して大師という所以を記す。 日蔵 51―605 仏解 1―237 国目 1―486</p>	<p>弘仁 5</p> <p>宇佐宮經釈文事 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―750</p> <p>成―弘仁五年 解―春大師神前に法華經講演の秘釈をなす。これ渡海宿願に賽するためなり。 日蔵 51―603 仏解 8―55 国目 1―361</p>	<p>弘仁 4</p> <p>長講仁王般若經会式 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2―321</p> <p>成―弘仁四年六月七日奥書 解―參堂三礼頌より結願頌一三段に及ぶ、前掲二者と共に三長講文にて大師止観院にて大同四年以来始む。 日蔵 51―603 仏解 8―55 国目 5―681</p> <p>長講金光明經会式 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2―311</p> <p>成―弘仁四年六月奥書 解―自他懺悔受戒発願により神祇登尊尊蓋皇帝父母の得脱と、日本国と仏法を守護せんことを祈る。 日蔵 51―63 仏解 8―55 国目 5―681</p>	<p>弘仁 3(大同 7)</p> <p>伝教大師消息 40通 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―758</p> <p>成―自大同三年八月二四日至同七年五月約八年間 解―主に高雄山寺における空海、泰範、智泉に送った書簡集、両大師の關係を知る文献にして、日本大蔵経(40巻)に中野達慧編「伝教大師余輝集」3巻と合せ見れば両師の消息は更に明になる。 日蔵 51―612 仏解 8―162 国目 5―814</p>

818	817
<p style="text-align: center;">弘仁 9</p> <p>成—弘仁九年五月十三日の上表文、解—山家学生式の一式で大乗戒壇建立を請願我が国に未だ純大乘の菩薩僧なし。円の十善戒在山十二年止観、遮那両業を修めた国宝、国師、国用をして社会の物心両面の事業に当らしめる字則である。日藏 51—567 仏解 4—136 国目 3—769</p> <p>比叡山天台法華院得業学生式 1紙 著—最澄 類—天台 在一活 伝全 4—719 別—比叡天台法華院得業学生式・比叡山法華院得業式</p> <p>成—弘仁九年五月一日奥書 解—六条式制定後の撰で法華院の年分度者、止観、遮那両業学生及一五以上二五以下の得業生在山十二年制の修学用心を定む。八条式制定前の試案か日本大藏経(39卷)の所謂山家学生式の後附にあり。山家学生式以外に此の別科生を置かんとせられたことがうかがえる。日藏 51—567 仏解 9—94 国目 6—723</p> <p>請先帝御願天台年分度者随法華經為菩薩出家表 1紙 著—最澄 類—天台 在一活 伝全 4—720 別—請菩薩出家表成—弘仁九年五月二一日奥書 解—同年五月一三日六条式を奏上したところ、護命等が大乗寺は天竺大唐にも亦日本にもないと反対したことを聞き、本表文を奉り、天台—宗が(延暦二五年)弘布されたが、法重くして人弱く甚だ振わず、山家仏教によって護国の忠をつくさんがために、一乗妙法蓮華經によって菩薩の出家を作り、毎年春三月一七日に勅使を差して、度者を得んことを懇願したものである。山家学生式の前附にあり。日藏 51—566 仏解 5—399 国目 4—494</p>	<p style="text-align: center;">弘仁 8</p> <p>法華 去惑 4卷 著—最澄 類—天台 在一活 伝全 4—33</p> <p>成—弘仁八年? 解—照権実鏡以後守護国界章以前の撰にして、守護国界章中巻と大同で、その草本が、共に徳一の中辺義鏡を破した一三権実論諍なり。日藏 51—584 仏解 10—64 国目 7—345</p> <p>六所造宝塔願文 1紙 著—最澄 類—天台 在一活 伝全 4—136</p> <p>成—弘仁九年四月二一日奥書 解—六所に法華千部多宝塔を建立毎日法華經を長講し真俗の化導、大日本国の鎮護を祈願した願文である。六所とは安東—上野宝塔院(緑野郡)安南—豊前宝塔院(宇左郡)安西—筑前宝塔院 安北—下野宝塔院(都賀郡) 安中—山城宝塔院(比叡山西塔院) 安総—近江宝塔院(比叡山東塔院)である。仏解 11—323 国目 8—178</p> <p>天台法華宗年分学生式 1巻 著—最澄 類—天台 在一活 伝全 1—5 別—六条式・天台法華宗年分度者二人六箇条</p>

819	818
弘仁 10	弘仁 9
<p>与元興寺護命大僧都書 1篇 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4—790</p> <p>成—弘仁一〇年三月三日脱稿(一心戒文上) 解—最澄六条式八条式を上奏して後、弘仁一〇年三月四条式を製す。これを僧綱元興寺護命の副署を乞いて嵯峨天皇に上奏せんため、請署名文とし親ら撰したものであるが、光定、良峰の異見につき、遂に僧都に呈せずして直に四条式を上奏した。 仏解 2—207 国目 2—299</p>	<p>勸奨天台宗年分学生式 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 1—7 別—八条式</p> <p>成—弘仁九年八月奉呈 解—山家学生式の一式で六条式の規定を細別し、得度者の試験法、補欠法、衣食規定、違法学生処分法等八箇条を定め、仏法住持国家利益、衆生の後世善進を計るための細則である。 日藏 51—568 仏解 4—138 国目 2—319・3—769</p> <p>守護国界章 9卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 1—189 別—守護章</p> <p>成—弘仁九年 解—頭戒論と共に最澄の二大著述。法華経を中心とする天台五時八教判、行位断惑、止観立行、定性二乗、経文解釈、分科等の天台大師の説に対し、徳一が玄賛の思想を以て批評否難したのを反駁し、天台の正義、山家の特徴を發表暗示し、その量質共に貴重な撰述で、去惑四卷は恐らく本章中巻の草本か、伝全初版より再版は稍相違す、特に再版上下三六頁に、本文脱字九六字を添加せるは顕著である。 日藏 51—584 仏解 5—48 国目 4—306</p> <p>弘惑中策 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 2—689</p> <p>成—弘仁九年以後の作 解—天台の立場より諸経の問題について論述した文献で、全篇随問随答二〇章より成る。 仏解 9—254 国目 7—114</p> <p>七難消滅護国頌 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 3—243 別—三部略長講</p> <p>成—弘仁九年か 解—最澄によって始められた護国三部長講会式の一、伝全(二)に本書とともに三本あり、即ち三部長講会式(前掲)と九院長講三部経会式(一心戒文)上と本書との三本で、その内最澄が行った長講会式の原型に、最も近いものは一心戒文の会式、最も原型を簡單化したものは本書、最も丁寧な形態は伝全二の三部長講会式にして、法華宗お会式法要の基本的資料なり、著作年代不詳とも云へるが今暫くここにおく。 日藏 51—603 仏解 4—338 国書 4—112</p>

伝教大師法華研鑽年表

伝教大師法華研鑽年表

天台法華宗年分度者回小向大式 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 1―10 別―四条文式
 成―弘仁一〇年三月奉呈 解―山家学生式の一式で寺院に一向大乘寺、一向小乘寺、大小兼行寺の別あるを説き、一向大乘寺は我国に無し、比叡一山を一向大乘寺とせんがため、大乘大僧戒を規定し、国宝を養成することを奏請したものである。

以上三式を山家学生式と総称し純大乘戒を立て、本宗の学生をして菩薩の大僧たることの公認を得んがため、比叡山で独自の得度授戒(円頓戒)を行はんと畢生の努力を尽されたが、僧綱三戒増制を变革するものとして容易に聴許を与えられなかった。日藏 51―567 仏解 4―138 国目 3―269

請立大乘戒表 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―772

成―弘仁一〇年三月一五日奥書 解―四条文式と共に上表し、大乘菩薩の大機を養成し、国家衛護群生福利のため、一向大戒の戒壇建立を切願したものである。日藏 51―566 仏解 5―399 国目 4―510

上願戒論表 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―777

成―弘仁一〇年一月二一日奥書 解―これについて一心戒文と伝教大師別伝との間に広略の相違あるため誤読の恐れある故田島得首は「弘仁一二年二月二九日先師(大師)の命を承けて上表したが、これより先其年二月二一日先師から云の命があつた彼の表文とは」と両文上表の日附一致を仏解に説明している。日藏 51―570 仏解 6―3 国目 1―424

内証仏法相承血脈(譜) 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2―513 別―内証仏法血脈・仏法血脈

成―弘仁一〇年一月二五日奥書 解―願戒論と共に嵯峨天皇に上進した撰述で三国仏法の相承(四宗)の縁由、叡山円宗の学系を示し、円戒運動の根拠を明かす。我国仏教史上数多ある血脈の藍筋なり。日藏 51―563 仏解 8―273 国目 6―214

天台法華宗年分得度学生名帳 1巻 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―738

成―弘仁一〇年奥書 解―大同二年より弘仁九年に至る年分度者二四名の学生名を列記し、更に弘仁一〇年の二名を加え計二六名の得度者名帳、師主、業別、住山、不住山、法相奪等を記す。日藏 51―579 仏解 8―144 国目 5―847

弘仁 12

顯戒論緣起 2卷(上存・下欠) 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 2―619
 成―弘仁一二年三月序文 解―上卷は入唐求法の詔勅より二四通の文書集録で、その中心は大唐の伝法、大乘戒を請う
 根拠を示し、下卷は欠本なるもその目次を通じて、南都との詳細な関係を知ることが得るも、これを失して遺憾であ
 る。尚日藏本には学生名帳を付す。日藏 51―570 仏解 3―169 国目 3―96
 比叡山東塔緣起 1卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―711
 成―弘仁一二年七月一七日序文 解―六所宝塔の一である近江の宝塔院の緣起にして、これは桓武天皇尊靈奉資の為の
 造塔なるを記す。仏解 9―94 国目 6―723

伝教大師法華研鑽年表

弘仁 11

上顯戒論表 1卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―724
 成―弘仁一一年二月二九日奥書(一心戒文) 解―一心戒文と大同小異にして先に弘仁一〇年南都僧綱の彈劾に対し健筆
 にて論破し大同二年より弘仁一一年迄の二四年間両業度者二八人、その中在山僅か一〇人に満たず、内外の情勢に鑑み偏
 えに戒壇建立の熱願を奏上したもので前掲の表といづれを上表したか、その大旨は同一であるが文章に広略の差あり。
 その簡潔は伝教大師別伝(仁忠伝全別一80) 詳細なるは一心戒文(光定伝全別一135) の所述にして戒壇建立史研究の貴重
 な文献なり。日藏 51―670 仏解 6―4 国書 5―124
 顯戒論 3卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 1―15
 成―弘仁一〇年一一年 解―嵯峨天皇は四条式と上表文の可否を真田宿禰の外僧綱に諮問せられると駁論の内奏あ
 り。最澄これを見て、その反論三卷を表と共に上る。総論には南都僧綱の上表文を破斥し、景深等の二八失を反駁、精
 密な大師の人格を忍ばしむるに足る重要文献である。日藏 51―569 仏解 3―168 国目 3―96
 決権実論 1卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 3―407
 成―弘仁一〇一一年本文に守護章(九年)の名を記し秀句(二年)にもその書名を列ねるに依る 解―弘仁七年徳一
 と三一権実の大論を初め、照権実鏡、守護章、去惑に続いて二乗成仏の能不、三車四車の問題について経論より論駁す。
 日藏 51―591 仏解 3―135 国目 3―87

弘仁 12

法華秀句 5卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4 33 別—法華輔照
 成—弘仁一二年旧本三卷現行五卷(上卷本末、中卷本末、下卷)中卷は後人の加入か 解—得一に對する權実論證の最後の大作にして、その一二年に亙る大論陣は一先づ本書を以て終つたらしい。即ち法華十勝を挙げ唯識、三論、華嚴、真言に對して、その信條を論証した晩年の代表的著作である。 日藏 51 594 仏解 10 70 国目 7 317

○成立年代未詳

再生敗種義 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 2 563
 成—未詳 解—敗種永滅の二乗を再生成仏即ち受記作仏するという教義成立の証文を法華、維摩、法華論、大智度論に求め三世の二乗も皆成仏すべしと説く。從來「天台法華宗習業最澄述」は後人の附記かとの疑義あるも、今は最澄の眞撰とする。 日藏 51 698 仏解 4 24 国目 3 646

法華廿八品肝要 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 3 477 別—伝教隨身抄・法華經一部要文・法華經廿八品肝要

成—未詳(弘仁一三年 仏解 10 80) 解—二八品の各品より肝要の文を八字或は一〇数字に抽出し、その文に「何品何字決」と付し要文を列ねる。即ち則為疾得無上仏道を宝塔品八字決第一とす、これ凡庸の業に非ず最澄の滅後義眞、円澄、錦囊を開きて之を得、実に掌中の至宝と称した。 日藏 50 406 仏解 10 80 国目 7 320

法華諸品大意 1紙 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 2 359 別—法華大綱・法華廿八品大意

成—未詳(弘仁一三年 仏解 10 76) 解—二八品の各品についてその大意を一言雙句に収め、僅か一紙に其の要旨を説き讃嘆す、構文流麗精緻なり。 日藏 50 407 仏解 10 76 国目 7 320

法華論科文 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 2 485

成—未詳(弘仁一三年 仏解 10 94) 解—最澄が本論研究に努力したことはこれに關する著作多きによつて知る。本書は科文といふより各品大意ともいふべきで、初分には論と台疏より法華經の科を示し兩者の分科相違を明らかにしている点は他の諸品釈と趣を異にし特に序品と方便品を釈していることは考うべきである。 日藏 50 113 仏解 10 94 国目 7 354

註無量義經 3卷 著—最澄 類—法華 在—活 伝全 2—363 別—無量義經開発・無量義經注鈔

成—未詳(弘仁一三年 仏解 8—52) 解—脚註の盛を以て誇る唐末にさえこの経註なく、最澄の本註あるは貴重なり。然しその記述に往々誤りある外に天台風の註釈未知と思われる。石田茂作博士の「写経より見たる奈良朝仏教の研究」に依れば、本経の註釈は奈良朝に伝えられているというから最澄は玄義文句等を閲読せずして本書を撰述せられたか或は奈良に所蔵の劉虬、吉蔵の註より抄録したものとも断定し難く考うべきである。日藏 50—404 仏解 8—52 国目 5—668

註金剛鑄論科文 1卷 著—最澄 類—天台 在—伝全 4—391 別—金剛鑄論註釈・註金剛鑄

成—未詳 解—巻首に「斯の文常途の経論に非ずと雖も亦之の効を欲し三段分を以てす」とある如く論主の科を示している即ち註金剛論巻首三文一〇段の科文である。 仏解 8—46 国目 5—658

灌頂行事鈔 3卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 3—1 別—灌頂七日行事鈔・台蔵界灌頂行事鈔

・胎界行事鈔

成—未詳 解—最澄入唐中永貞元年四月越州章興寺において順暁より両部灌頂を伝授した作法を伝たもので、灌頂七日間の行事を鈔録している。即ち「第一日 定処 千部法華経殿内八肘之地」とありその他大日経義釈、蘇悉地集経等に依り、灌頂の行儀を明かにし本朝灌頂行事鈔中最古の形式という。日藏 51—646 仏解 2—118 国目 2—319

天台法華宗伝法偈 1卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 3—447 別—山家伝法偈

成—未詳(弘仁一三年 仏解 8—113) 解—釈尊の法華説法の因縁、内容、法華宗伝灯者の略伝、最澄が道遠、行滿に受法し最後に唯識、華嚴、密教、禪、律、因明の相承に及ぶ。文中聖徳太子を南嶽慧思の再誕と記せるは注意すべきで、構文はすべて五字一句始終一三七四句の偈頌文である。日藏 51—557 仏解 8—113 国目 5—847

天台法華宗付法縁起 3卷 著—最澄 類—天台 在—活 伝全 4—717

成—未詳 解—修禪目錄によれば巻上二一紙巻中二一紙巻下三〇紙以て本書の調卷枚数等を知る。現今逸すと雖も伝全旧版二断簡同新版一一断簡を上官太子拾遺記、聖徳太子伝雜勅文伝通縁起より(付法縁起断簡)蒐録して本書を編す。

仏解 8—114 国目 5—847

師資相承血脈文 1卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 4―745

成―未詳 解―一乗の玄旨一境三諦の妙法が釈迦、迦葉、阿難より竜樹に至り、更に羅什等により中国に伝来し、傳大士、恵文、恵思と相承して天台智者により大成、灌頂く湛然、道邃、遂に最澄に及ぶ師資相承の血脈を記したもので、凡そ天台法華宗血脈に同じで簡なるものである。 仏解 4―261 国目 4―64

菩薩次第明扼 1卷 著―最澄 類―天台 在―活 伝全 3―169

成―未詳 解―学生式の新制により単授大乘戒による菩薩僧が公認される場合には、南都等の共行戒壇にて受戒せる僧との座次が問題になるので、梵網經註疏を引用して、菩薩僧の座次の明扼を示したものである。 日藏 51―582 仏解 9―399 国目 7―325

受菩薩戒儀 1卷 在―活 伝全 4―1 別―一乗比丘戒儀・十二問戒儀

成―未詳 解―受菩薩戒の次第作法を記す智証の朱書註あり。 日藏 51―581 仏解 5―102 国目 4―325

和歌 八首 在―活 伝全 4―756

成―未詳 解―新古今集(統)・新拾遺和歌集・和論語に記された最澄作と伝える和歌で、比叡山中堂建立の時、方便品、法師品、分別功德品等八首の和歌である。 仏解 11―343